

17 格識順天堂医院手術傍観録

西井 易 穂

人・健康・医の研究所

第一〇五回本会にて西井格太郎の履歷画の存在と格識順天堂医院手術傍観録なるものを見出したこと、およびこのものは順天堂大学医史学研究室保管富山專一識順天堂医院手術傍観録と同一の文章からなることを報告した。この両傍観録は明治初期の外科手術の実態を知る上で貴重なものである。

今回は格識傍観録の内容概略を紹介し、專一識のものととの関連性について考察を加えたい。格識傍観録は二冊本で総頁四一五頁からなり、專一傍観録は薄く三冊からなるが、内容的には同一の文章、挿絵から成り立っている。

その記載は患者の来歴、進先生の診察とその病気に對する解説それは当時の最新の國際的知識であり、そ

れを踏まえた上での進先生はその患者に對する手術方針が述べられており、いたるところで、患者の手術施行の同意を求めている。最後に手術の詳細な描写が記載され終了している。手術後、病室に移行して以後の経過記録はなく、失敗例の記載は皆無で、記述されている外科手術は多岐に亘る。

例えば、痔瘻二八例を筆頭に諸種成形手術、乳がんを含む諸種癌腫、骨肉腫の手術、骨切断術、脱肛、包茎手術、兔唇などさまざまな手術がでてくるが、中に鼻茸というのが、一二例でてまいります。また、一例の胃潰瘍死体解剖の詳細が紹介されていて、興味深い。格太郎は眼科医としての国家試験を受け、認定されているが、順天堂における眼科領域の手術は一四例傍観している。眼科治療に関してその時代の名医井上達也に師事したことが、履歷画、ならびに顕彰碑に明示されている。佐藤進先生の格太郎に對する順天堂医院で助手を勤めていたことを保証する直筆の保証書によると、格太郎は明治一三年七月より明治一五年五月までと記述されている。格識傍観録の記録は明治一四年二

月より明治一五年三月までの記述で、専一識は四月で終了している。明治一四年一月二八日までは大変詳細な記述になっていて重複してでてくる手術に関しては簡略化されているが、その後三月までの記述はほとんどの記載が簡略化されている。この期間における詳細な記録は専一識では四例、格識では一例にとどまる。そして両者の記載内容が異なっている。明治一四年の記載内容を詳細に対比してみると、図中の解説文とか挿入修正された文章を見ると、お互い補って同一文章になっている。明治一四年一月より一二月まで順天堂において外科手術を受けた患者は一七五名に達するという記載がある。これら記述内容はすべて格太郎が順天堂医院に在籍していた期間内のことです。格識傍観録には専一識の傍観録には見られない格太郎独自の文献調査メモが最後に東京医事新誌抜粋として九一ページ、死亡届取扱規則五ページが記述されている。

今のところ、専一が順天堂医院に在籍した期間が不明であるが、専一は格太郎と同郷の士であり、伊賀上野福居町出身であることが、ほかの格太郎筆メモで明

らかになった。以上のことを考慮するとこの傍観録は二人の合作であると判断する。その後の調査で専一が三重県私立衛生会委員の一人であり、伊勢地方で赤痢が蔓延したとき、明治二七年眼科医の格太郎にその疫病対策医師として就任することを委嘱した記録が残っている。順天堂医院で近代医学の最先端の医療に携わった経験が買われたこと、当時は国家試験の免許取得範囲以外にも諸種病気の治療に携わることが容認されていたことによるものと考えられる。二人は帰郷後も緊密な連携を保っていたことを知りうる。